

鹿児島県立短期大学における家政学教育・研究の起源

生活科学科 准教授 倉元 綾子

はじめに

鹿児島県立第一高等女学校専攻科（以下、一高女専攻科と表す）および鹿児島県立女子専門学校（以下、鹿女専と表す）は、鹿児島県立短期大学のルーツであり、鹿児島県における女子高等教育の草分けとして少なくない役割を果たした。これまで一高女専攻科と鹿女専の同窓会の『あふち薫りて 85周年記念誌』（あふち会、2008）や『鹿児島県立短期大学四十周年記念誌』（鹿児島県立短期大学四十周年記念誌編集委員会、1990）でその成立や歴史、役割の概要は概ね明らかにされている。しかしながら、なお、欠失も少なくなく、不明な点も少なくない。

そこで、ここでは、それらを補うべく、成立の経緯、カリキュラム、施設設備、教員について資料を採求したので、その一部を明らかにする。

1. 研究方法

研究にあたっては、本学生活科学科、本学図書館、鹿児島県立図書館、国立公文書館、鶴丸高校同窓会、中央高校など、関係諸機関の資料を収集し、文献研究を行うとともに、実地に観察した。

2. 鹿児島県立第一高等女学校専攻科のカリキュラムの変遷

一高女専攻科の成立は1922（大11）年であるが、その設立に関しては不明な部分も少なくない。今回の調査によって、1927（昭2）年9月の「専攻科学科科目並程度変更認可」書類（国立公文書館蔵、個別の資料件名は示さなかった）から設立当初のカリキュラムに近いものが見つかった（表1）。

それによれば、一高女専攻科は単一の学科で、3年間の間に、修身3、国語及漢文11、歴史6、理科9、家事15、裁縫及手芸25、法制及経済6、音楽3、体操6、英語6、教育6、総計84を履修することになっている。

当時の福岡女専のカリキュラムでは、修身4（一高女専攻科より多い場合を 、少ない場合には を付す）、国語6、理科4、家事17、裁縫39、法制及経済2、音楽3、体操6、教育6、総計95となっており、英語と歴史は課されていない。

一高女専攻科では授業時数も少なく、家事、裁縫に重きを置いている点には変わりがないとはいえ、教養科目も重視していたことがわかる。

カリキュラムのこのような特徴が何に由来するのか、当時の鹿児島の社会状況など、今後の解明が求められる。

表1 設立当初のカリキュラムと思われるもの（1927年）

計	英語		教育		心理學		修身		國語及漢文		歴史		理科		家事		裁縫		図画		音楽		体育	
	時数	科目	時数	科目	時数	科目	時数	科目	時数	科目	時数	科目	時数	科目	時数	科目	時数	科目	時数	科目	時数	科目	時数	科目
二八	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上
二八	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上
二八	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上
二八	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上

(国立公文書館蔵)

次に、表2、表3には、第1部 家事ヲ主トスルモノと第2部 裁縫ヲ主トスルモノの2部に分かれた1928（昭3）年からのカリキュラムを示した（国立公文書館蔵）。

申請のやりとりの過程で、随意科目として計画されていた第1部の音楽、第2部の音楽と英語が削除されたことがわかる。

その結果、第1部では、修身3、国語及漢文6、歴史3、数学1、理科10、家事28、裁縫16、図画2、法制経済2、体操6、英語6、教育7、総計90となり、音楽がなくなった。第2部では修身3、国語及漢文6、数学1、理科6、家事11、裁縫46、図画2、法制経済2、体操6、教育7、総計90となり、歴史、音楽、英語がなくなった（増加した場合には_を、減少した場合には__を付した）。

こうして、家事と裁縫のそれぞれに重点を置く各部の特色が明確になった。しかし、それでもなお福岡女専に比べて、教養科目が多く置かれている点に特長がある。

表2 第1部 家事ヲ主トスルモノ (1928年)

計	算	英	法	理	教	國	第一部			
							第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
計	算	英	法	理	教	國	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
算	算	英	法	理	教	國	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
英	算	英	法	理	教	國	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
法	算	英	法	理	教	國	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
理	算	英	法	理	教	國	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
教	算	英	法	理	教	國	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
國	算	英	法	理	教	國	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
第一學年	算	英	法	理	教	國	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
第二學年	算	英	法	理	教	國	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
第三學年	算	英	法	理	教	國	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
第四學年	算	英	法	理	教	國	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年

(国立公文書館蔵)

表3 第2部 裁縫ヲ主トスルモノ (1928年)

計	算	英	法	理	教	國	第二部			
							第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
計	算	英	法	理	教	國	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
算	算	英	法	理	教	國	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
英	算	英	法	理	教	國	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
法	算	英	法	理	教	國	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
理	算	英	法	理	教	國	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
教	算	英	法	理	教	國	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
國	算	英	法	理	教	國	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
第一學年	算	英	法	理	教	國	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
第二學年	算	英	法	理	教	國	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
第三學年	算	英	法	理	教	國	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
第四學年	算	英	法	理	教	國	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年

(国立公文書館蔵)

その後、1931（昭6）年12月にも学則改正が行われ、表4、表5のようにカリキュラムが大きく変更される（1932（昭7）年1月認可）。追加または変更されたものが赤字で示してある。各部とも数学、漢文が削除された。第1部では理科、家事の時間数が増え、第2部では手芸が追加された。また、学年による内容や配当時間の変更が行われた。

さらに、このほかに家事の実習研究と音楽の器楽使用法が課外として課されるとともに、第3学年第2学期、第3学期に3週間の教育実習が課されることになった。

表4 第1部 家事ヲ主トスルモノ（1932年）

計	英語	法則經濟	体操	教育	圖画	裁縫	家事	理科	歴史	國語	修身	學科	學年
												第一學年	第二學年
	講讀、文法、會話		体操、放線、遊技	論理	圖案	和裁、洋裁	衣服住居、刺果	物理、化學、生理		講讀、作文	實踐、倫理	第一學年	五週 五時
三〇	二		二	二	二	五	九	六		一	一	第二學年	五週 五時
	同上	法則經濟、交易	同上	心理教育大意		同上	食物、洗濯、刺果	物理、化學、生物	文化史	同上	國民道德	第三學年	五週 五時
三〇	二	一	二	二		六	九	五	一	一	一	第三學年	五週 五時
	同上		同上	教育史、教授法、管理法		同上	家庭經濟、教授法	化學、實驗	同上	同上	倫理學大要	第三學年	五週 五時
三〇	二		二	三		五	二	二	一	二	一	第三學年	五週 五時

(国立公文書館蔵)

表5 第2部 裁縫ヲ主トスルモノ (1932年)

計	法科經濟	体育	教育	圖画	手藝	裁縫	家事	理科	國語	修身	學科/學年	第2部 (裁縫ヲ主トスルモノ)
		体操教授法	論理	圖案	刺繍物、染物	和裁洋裁	衣服食物	物理化學生理	講演作文	實踐倫理	第一學年	
	三〇	二	二	二	一	一四	四	三	一	一	講義 道數	
		法科經濟大意	同上	心理教育大意	同上	同上	割烹	同上	同上	國民道德	第二學年	
	三〇	一	二	二	二	一七	二	二	一	一	講義 道數	
		同上	教育史教授法 管理法	同上	同上	育兒、育種割烹			同上	倫理學大意	第三學年	
三〇		二	三	二	一六	五			一	一	講義 道數	

(国立公文書館蔵)

戦前最後の時期のカリキュラムは1939（昭14）年度のもので鹿女専の設置申請時に提示されたものである。表6、表7にそのカリキュラムを示した。この時点では、家事の実習研究、音楽の器楽使用法、生花が課外として課されるとともに、従前と同様、第3学年第2学期、第3学期に3週間の教育実習が課されている。

表6 第1部 家事を主とするもの（1939年）

部	学年	科目	数時	部	学年	科目	数時	部	学年	科目	数時	部	学年	科目	数時
第一	第一	講義、作文、文法	二	（家事ヲ主トスルモノ）	第一	實踐倫理	二	第二	第二	國民道徳	二	第三	第三	倫理學大要	二
	第二	講義、文法	二		第二	文化史	二		第三	倫理學大要	二				
	第三	講義、文法	二		第三	文化史	二		第四	倫理學大要	二				
	第四	講義、文法	二		第四	文化史	二		第五	倫理學大要	二				
計		三〇				三〇				三〇					三〇

(国立公文書館蔵)

表7 第2部 裁縫を主とするもの（1939年）

部	学年	科目	数時	部	学年	科目	数時	部	学年	科目	数時	部	学年	科目	数時
第二	第一	講義、作文	一	（裁縫ヲ主トスルモノ）	第一	實踐倫理	一	第三	第三	倫理學大要	一	第四	第四	倫理學大要	一
	第二	講義、作文	一		第二	國民道徳	一		第三	倫理學大要	一				
	第三	講義、作文	一		第三	國民道徳	一		第四	倫理學大要	一				
	第四	講義、作文	一		第四	國民道徳	一		第五	倫理學大要	一				
計		三〇				三〇				三〇					三〇

(国立公文書館蔵)

3. 施設設備および敷地

一高女専攻科は1922（大11）年に一高女に附設された関係から、施設設備は共用することを前提にしていたと考えられる。それでも、専攻科設立時には6586円もの予算が充てられたという（あふち会，2008）。これらの努力を示すように、本学生活科学科には、一女

と書かれた漆器が現存する。また、図書館には一高女の印が押された図書が多数存在する。



図1 漆器の裏書の「一女」
(撮影, 倉元) (本学蔵)



図2 漆器 (撮影, 倉元) (本学蔵)

また、1932（昭7）年には一高女の修業年限を4年から5年に変更するとともに、校舎の増築と経費が予算化された。加えて、1935（昭10）年11月の昭和天皇行幸において大本営行在所になることが決定した。これを受けて、一高女は、増築ではなく、改築されることになった。設計は鹿児島県土木科の岩下松雄である。なお、岩下と一高女の建物に関しては研究資料が存在する（土田ら、1996；吉永、1998；川島、2017）。ここでは、この建物に4スパンの割烹室、3スパンの割烹室、3スパンの洗濯室などがあり、きわめて充実した施設を誇ったことがうかがわれることを指摘しておきたい。



図3 鹿児島県立中央高校エントランス (撮影, 倉元)



図4 同講堂 (撮影, 倉元)

また、現在の県短の敷地には、1945年8月まで第45連隊があった。そのことを示すものとして、正門、正門前の歩哨舎跡、昭和天皇が皇太子時代のお手植えの楠、第45連隊記念碑、給水塔（伝）など、記念し、記録にとどめておくべき箇所が少なくない。これらに関する由来を掲示板等で示すことは今後の県短の歴史研究に有用であると考ええる。



図5 本学正門（営門）（撮影，倉元）
（本学）



図6 昭和天皇お手植の楠（撮影，
倉元）（本学）



図7 歩哨舎跡（撮影，倉元）（本学）



図8 第45連隊記念碑（撮影，倉元）
（本学）



図9 給水塔（伝）（撮影，倉元）
（聾学校内）

4. まとめに代えて：今後の課題

今日の鹿児島県立短期大学の源流である鹿児島県立第一高女専攻科が設置されてから96年、短期大学設立から68年が経過した。これまで、鹿児島県における女子の教育機関として、一高女、女子専門学校、鹿児島県立大学短期大学部、鹿児島県立短期大学の果たした役割は大きい。今回の研究を踏まえて、今後、その歴史を検討するうえでの課題を挙げておきたい。

(1) 歴史資料の整理

上述したように、現在鹿児島県立短期大学の歴史をたどるのは容易ではない。たとえば、国立公文書館に保管されていた設立時（1921、大正10年）の設置認可関連書類は、残念ながら、1926年（大正15）の火事により失われており、未だ現物は確認できていない。また、一高女専攻科、女専、県短と変遷するうちに移転や戦争によって失われた資料も少なくない。県短になってからの資料についても貴重な資料が時とともに散逸してきている。そこで、図書、写真、現物を含む本学の歴史に関連する資料を整理し管理するシステムの構築が求められる。

(2) 教員と卒業生

本学の発展に尽くした教員が数多く存在する。たとえば、食物栄養専攻では、女専時代から学生の教育と研究に従事し深く慕われた長船鏡湖や坂本清らがいる。しかしながら、今日、それを知る人は少なくなっている。そこで、本学に関係した教員や学内外の人々がどのような寄与をしたのか、その人物像や業績についての検討が必要である。



図10 長船（後藤）鏡湖先生レリーフ（撮影，倉元）（本学蔵）



図11 後藤鏡湖文庫目録（撮影，倉元）（本学蔵）



図12 後藤鏡湖文庫（部分）（撮影，倉元）（本学蔵）

(3) 年譜

現在までのところ、一高女専攻科、女専、県短を通じた年譜は作成されていない。そこで、本学における重要事項を社会的事象とともに記述し、これまでの歴史を社会的背景のもとで考察できるようにすることが求められる。

今後も引き続き未解明な部分について検討したい。

5. 謝辞

本研究にあたり、一高女専攻科同窓会、鶴丸高校同窓会、鹿児島県立中央高校の関係者の皆様に資料のご提供やご指導を賜りました。記して深く感謝いたします。

6. 参考・引用文献

- 後藤鏡湖文庫目録. 鹿児島県立短期大学所蔵. 1966
- 鹿児島県立第一高等女学校同窓会. 同窓会だより. 2003, 50号
- 川島智生. 昭和前期・鹿児島における学校建築の成立と特質について：鉄筋コンクリート造校舎と技師岩下松雄. 季刊文教施設. 2017, 68号, 10, 62-70
- 南日本新聞. この人に聞く：岩下松雄, “外観より中身”：气象台, 一高女など設計. 1965年7月5日
- 南日本新聞. かお：岩下松雄<格好より住みやすさが第一>. 1973年5月19日
- 南日本新聞. 南風録（岩下松雄）. 1991年1月22日
- 清水讓. 清水の建築漫遊記. 建築知識. 1995, 7月号, 165-166
- 土田充義・揚村固. 地方の建築家岩下松雄. 日本建築学会九州支部研究報告. 1991, 32
- 吉永和人. 鹿児島中央高校本館の建造物としての価値について. 鹿児島中央高校研究紀要. 1998, 26号